

連句は、同好の仲間が集まり、五七五七七の句を詠み連ねて共同作品を編んでゆく。伝統的な「座の文芸」だけに敷居が高そうだが、実際に詠んだ連句は笑い声が絶えず、楽しい集まりだった。前の句を自分なりに読み解き、新しい展開、飛躍を考え、一句詠んだら次を考える。人間の幅や大人の知恵が生きてくる言葉遊びだ。

「俳句と連句と両方やる仲間には『俳句は苦しい、連句は楽しい』と言います。百聞は一見に如かず。まず、ご覧下さい」。金澤メーカール役員の高岡慧さん(59)に誘われて、九月半ばの土曜日、東京・上野公園の東京文化会館で開かれた連句会「草門会」を見学した。

多彩な顔ぶれ参加

午後一時半過ぎ、十数人の連衆(参会者)が集まった。連句入門書を書いた元雑誌編集者、フランス文学の教授、カルチャー教室出身の主婦、インターネットで連句を始めたい若者……。老若男女、連句のキャリアもさまざま。草門会は二十年前に発足し、先鋭的な作風で知られるが、気が取ったところは全くない。

ひときり声が大きいのは、創設メンバーで内科医の川野嘉彦さん(77)。俳号は「蓼(りよ)」。息子が「お母さんはなぜお父さんと結婚したの」と聞いたら、娘が「蓼(た)」。食う虫も好き好きよ」と言った。また、小学生だったのに「と笑う。

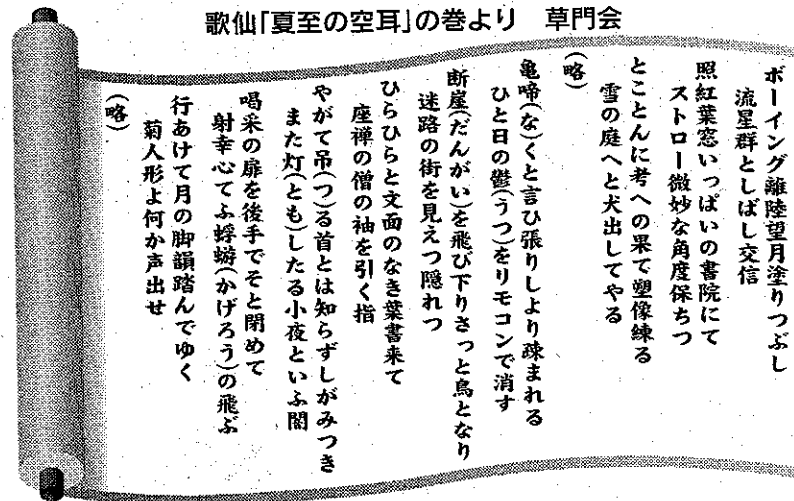
「人数が多いから二組に分けましょう。こちらの組の捌(さ)はききまはさんですね。粗(こ)はさんか板書します。高岡さんの俳号は粗製濫造の略に違いない。俳号のユーモア

壮

言葉のリレ、膨らむ想像



連句を楽しむ草門会のメンバー (東京都台東区)



歌仙「夏至の空耳」の巻より 草門会

「ボーンと離陸望月塗りついで」
「我死なば汝(な)が骨欲しと言はれし秋」
多数決で「ボーン」が採られる。まずは、これに付ける脇の七七をみんまで出し

ボーイング離陸望月塗りついで
流星群としばし交信
照紅葉窓いっばいの書院にて
ストロー微妙な角度保ちつ
とことん考へる果て想像練る
雪の庭へと犬出してやる

「略」
「略」

大人の知恵の見せ所

合つ。川野さんが「望月は仲秋。人情はありません」と注意を促す。秋の句は三句以上続ける決まりだが、同じ秋の句でも初秋に戻ってはいけな

「また、人情というのは人間が出てくるかどうかで、人情なしは二句で捨てる」とい

「この日、最も座を沸かせたのは、歌仙の二十四、五句目。元化粧品会社員の大橋俊彦さん(71)の恋句「座禪の僧の袖を引く指」と、作家で俳人の真鍋真夫さん(87)がそれに付けた句「やがて吊(つ)る首とは知らずしがみつき」だった。

恋句の多くは想像の産物だが、「そこが私小説的な文芸と違って、自由に気楽です」と高岡さん。「そう言えば、Kさんは恋句の名手だった。「風(こがらし)を右の目で見ると川野さん」なんてうまいよな」と川野さんは早世した才色兼備のキャリアアーマンを

懐かしむ。
初心者の句も、捌きが少し直していくか採用した「みんな平等。上手な句ばかりでも駄目なんです。グループで現代詩を編んでゆく感覚で、軽い受けやシュールな句も入れます」(川野さん)。グループによって、作品の傾向はかなり違うようだ。

共通しているのは、自分の句をひたすら磨き上げる俳句と違い、わいわいがやがや、みんなで勝手なことを言い合っている。共同作品を作り上げるのが、三十八句目の俳(あ)げ句が仮面はすして陽炎(かげろふ)を行く」に決まり、歌仙「夏至の空耳」が巻き終ったのは午後七時過ぎ。その後、食事に繰り出して夜半に及んだ。

(編集委員 牧内定大)

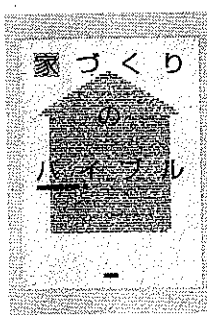
言葉のリレ、膨らむ想像

う決まりがある。

決まりは、全体をバラエティーに富ませ、転換を面白くする方法としては合理的だ。連句で一般的なのは歌仙という三十六句を連ねる形式だ。芭蕉は「歌仙は三十六歩なり。一歩も後に帰る心なし。行くにしたがいの改まるは、ただ先へ行く心なればなり」と述べている。

虚構の世界に遊ぶ

俳諧を研究する宮脇真彦早稲田大学教授は「自分の言葉のイメージに固執しない。自分が発した言葉が共有され、そこから新しいイメージへと



「家づくりのバイブル」

女性建築技術者の会著

生涯に一度の大事業と言っても過言ではない、マイホームづくり。だからこそ、後悔しないための基本を知ってほしいと提案するのが本書だ。

アドバイスするのは、建築の仕事に携わる女性たちの会のメンバー8人。「建主との丁寧な話し合いによる家づくり」をモットーに、キャッチフレーズに感わされない、快適な住まいの確保の先導役をかって出る。

外断熱と内断熱の違いや、地盤と建物に合わせた基礎固めの重要性、住む地域によって異なる法律など、はずせない基礎知識や考え方のポイ

必殺シラミつぶし

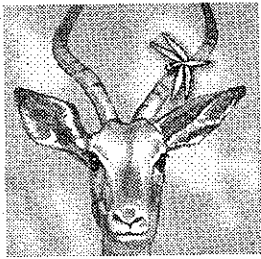
気の毒しか記憶にないが、元気があったら、わが子と指相撲をしていたらしい。

わが子だけでなく仕事仲間もしていたという。たぶん酔余のことだろうが、大のオトナが腕まくりして親指を動かしている姿は平和でい

フロンタート

い。父はつねづね自分の指の強さを自慢していた。

「一つには親指が少し変わって、父の場合、なぜか親指だけヨコ長だった。指自体が丸まっつて、そこに爪がヨコにひびき入り、タテ幅が短い。母は五十二で亡くなったが、生前よ



池内紀

りしたのではなからうか。

「シラミ退治の指」
そんなやつにも称していたそう。戦後まもないころ、一時のぎに教師をしていた。クラスの生徒の頭にシラミを見つけたらすると、やおら必殺の親指が登場した。なぜ必殺なのか?

シラミは人血を吸って逃げたりしない。モンモン這って逃げる。そして生き物の本能で、逃げ方をよく知っている。人間の爪はタテに長いので、タテに逃げてはダメ。長い距離をいく間にフチリとつぶされる。逃げるのは短距離コースのヨコにかき

「アレレ、どういづことだ？」
父の指ではヨコが長距離である。

逃(にげ)中のシラミが行き来して、愚案してはいると、フチリとつぶさる。すなわち必殺シラミつぶしだ。

父はまじめな顔をして、ときおりそんな話をしていた。話すだけでなく、爪の上のシラミの動作までやってみせる。モンモンと逃げ出すシラミ。やがて疑念がきき出して立ち止まる。なぜハシにこないのか腕組みして考える。そこをみまわし、親指の爪と爪とを対面させて押しつぶす。

せつかく必殺の親指を受け継いだのに、身辺からシラミが消え失せて活躍の機会がない。子供たちが大きくなって栗の山の出番もなし。初代栗の山はほとんど記憶にないが、いっしょに酒を飲んだことが、ふと

(ドイツ文学者)

「オサムは親指がお父さん似だね」
子供たちのうち、なぜか私だけが父と同じく親指が丸まっつて、爪がヨコ長である。「栗の山」は絶妙な命名で、全体がドン栗を思わせ、相撲でいえる、かつて「突貫小僧」とよばれて人気があった富士屋とい

った感じ。父もきつとドンと突っ込み、押し上げたあと、ハタキこんだ

「このごろは親子で指相撲をしたりするのだから。親指を立て、あとの指は軽く曲げるかたち。曲げた指をからませて四つに組む。あとは親指同士が組んずはれつ。おとこはつけて動きを封じたほうが勝。

私の父は指相撲が強かったそう。たいてい酒が入って上機嫌のときだったようだが、「二丁やろう」と腕を差し出す。自分の親指を「栗の山」と名づけていて、「ヒゲアーシ、クリノヤマ」。呼び出しまでやってみせる。

「ハツケヨーイ、ノコッタ、ノコッタ」
行司役も兼任で、忙しく親指を動かす。「勝負あった！」と凱歌を上げた。

すべて母から聞いたことである。父は一年ちかく寝こんだのちに四十六歳で死んだ。幼なかつた私には病